

多くの病人をいやす

マルコによる福音 1:29-39

すぐに、一行は会堂を出て、シモンとアンデレの家に行った。ヤコブとヨハネも一緒であった。シモンのしゅうとめが熱を出して寝ていたので、人々は早速、彼女のことをイエスに話した。イエスがそばに行き、手を取って起こされると、熱は去り、彼女は一同をもてなした。夕方になって日が沈むと、人々は、病人や悪霊に取りつかれた者を皆、イエスのもとに連れて来た。町中の人々が、戸口に集まった。イエスは、いろいろな病気にかかっている大勢の人たちをいやし、また、多くの悪霊を追い出して、悪霊にものを言うことをお許しにならなかった。悪霊はイエスを知っていたからである。

朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れた所へ出て行き、そこで祈っておられた。シモンとその仲間がイエスの後を追い、見つけると、「みんなが捜しています」と言った。イエスは言われた。「近くのほかの町や村へ行こう。そこでも、わたしは宣教する。そのためにわたしは出て来たのである。」そして、ガリラヤ中の会堂に行き、宣教し、悪霊を追い出された。

説教

シモンのしゅうとめが熱を出して寝ていたので、人々は**早速、彼女のことをイエスに話した**。イエスがそばに行き、手を取って起こされると、**熱は去り、彼女は一同をもてなした**。マルコ 1 : 30-31

「手を取って起こされる」というイエスは印象的です。病気の人に触れてその人をいやすイエスは文字通り「手当」をおこいました。イエスに触れることは、病人にとって大きな励みだったことだと思います。この手当て出来事の後人々はシモンの家に村中の悪霊憑き、病人をつれていき、イエスに手当てしてもらいます。シモンのしゅうとめのエピソードはルカ福音書(4 : 38-39)にもありますが、ルカではイエスは熱を叱ったとあります。マル

コでは、ことばのイエス（悪霊をしかりつけるイエス）ではなく行動するイエス（病人の手を取るイエス）を伝えています。

イエスの活動は「宣教し、悪霊を追い出す」というものでした。

ガリラヤ中の会堂に行き、宣教し、悪霊を追い出された。 マルコ 1 : 39

悪霊を追い出すと病気が治る当時はこう信じられていたようです。いまの時代からみれば迷信もいいところなのですが、なにか目に見えない悪いものが人のからだに入り込むと病気になる、悪霊を追い出すということは病気の原因を取り除くこと、こう分析的に考えると、目に見えないなにか、ウイルスやばい菌、が体内にはいると病気になるからクスリを飲んで、あるいは外科手術して治す、今も昔もこの観点からみればそれほど違いがあるとも思えません。

ところで「宣教する」と訳されたギリシア語の「ケリュツソー」は、「告げる、のべ伝える」という意味です。何をのべ伝えるかといえ、マルコ 1 章 14-15 節にあった「神の福音」、すなわち「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」ということ（これはマルコ福音でのイエスの第一声でもあります）になります。

ところで「信じなさい」というその内容とは何か？

マルコ福音書はまだ始まったばかりなので、読み進めていけばその内容が書いてあるかといえますと、書いてありません。（とわたしは思います）

キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと、ケファに現れ、その後十二人に現れたことです。 - コリ 15:3b-5

一般的には聖書が伝えている福音とはこれですと説明されます。

福音がイエスが十字架で死んで復活することだとすると、その内容の福音を生きているイエスが自分で宣教することはできません。イエスの生涯そのものが福音だといえるからです。それはとても一言で言い表せるものではない

でしょうし（イエスでなくたってふつうの人でも同じことです）また、書き表すこともできないことでしょう。ヨハネ福音書ではにはこのよう締めくくられます。

イエスのなさったことは、このほかにも、まだたくさんある。わたしは思う。その一つ一つを書くなれば、世界もその書かれた書物を収めきれないであろう。ヨハネ 21:25

わたしたちはヨハネのこのことばに習うなら、ふつうの意味合いでイエス物語を読むことも聞くこともできないでしょう。一人で聖書を読む、みことばに耳を傾けることを軽んじるわけではありませんが、わたしたちが主日に集まって、集められて、信じる者として、みことばを聞くこと、それが主イエスが宣べつたえた福音である、そこにこそ福音を理解するポイントがあるとわたしは信じています。
